



神戸国際大学 キリスト教センター通信



建学の精神 『神を畏れ 人を恐れず 人に仕えよ』

〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中9-1-6
TEL 078-845-3103 e-mail: chapel@kobe-kiu.ac.jp

◆ 神々しい響きに
包まれて ◆

キリスト教センター長

近藤 剛



筆者とピアニスト弓張美季さん

2015年10月24日、本学のチャペル（諸聖徒礼拝堂）において、ネパール大地震被災者支援チャリティー・コンサートを開催しました。白砂伸夫教授のご尽力により世界的に活躍されている神戸出身のピアニスト弓張美季さんを奏者としてお迎えできたことは大変喜ばしいことでした。サントペテルブルクで学ばれたことにちなみ、全曲ロシアのプログラムを神秘的、情熱的、魅惑的に披露して下さいました。本学チャペルでは初めてのピアノコンサートということで、今回は特に日本ピアノサービス株式会社

社のご協力を得て、ニューヨークのスタインウェイ社のピアノを搬入しましたところ、大変素晴らしい音色が会場を包み込み、満堂の聴衆は圧倒され、感動の渦に巻き込まれました。至聖所（チャペル）でイエス・キリストに見守られながら演奏することの意義を十二分に理解されている美季さんだからこそ、あのような神々しくも美しい音色を奏でて下さったのだと思います。

多くの方々が開催趣旨に賛同され、来聴されました。そもそもチャペルとは、人々が集い、祈りをともにし、交わりを深める場所にはかなりません。チャペルの存在理由を改めて捉えなおすことができた絶好の機会ともなりました。

今後も、キリスト教センターでは多彩なプログラムを構想し、実現させてまいります。なお、チャリティーでの収益金はNCC（日本キリスト教協議会）を通じて、キリスト教系国際援助組織ACTアライアンスへ送金いたします。これからも皆さまのいつものご協力をお願いいたします。

（経済学部教授）



◆聖歌隊に参加して

リハビリテーション学部1年生

藤波 心



今回のクリスマス礼拝では、皆さんの前で初めて聖歌を披露しました。

リハビリテーション学部からは全部で5名の参加で、数少ない練習の中でお互い協力し合いながら無事に本番を迎えることが出来ました。

四月に入学し、せっかく聖公会の学校に来たのに、中々それについて学ぶ機会や触れる機会も少なく残念だなと思っていたところ、参加してみませんか？と誘っていただき、とても嬉しかったです。

礼拝ではオルガニストの伊藤純子先生の素敵な演奏にのせて聖歌を歌い、とても贅沢なひと時を過ごすことができました。

聖歌を歌うことは皆初めてで、もちろん不安もありましたが、皆で成し遂げることで、団結力や信頼関係も生まれ、とても貴重な経験になったと感じています。

リハビリテーション学部は専門科目や実技系の科目で勉強もかなり

◆◆◆◆◆

大変ですが、今回参加した事で気持ちもリフレッシュできて、礼拝後も、それぞれまた新たな気持ちで勉強を進められたことと思います。

クリスマス礼拝に参加するにあたって、普段のお昼の礼拝や練習で何度もチャペルに足を運ぶようになり、同じ学内でも日々の喧騒を忘れさせるような、少し非日常的な空間に触れることで、心も清められるような感じがありました。

学内にチャペルがあるという、恵まれた環境にいますので、是非もっと沢山の人にキリスト教やチャペルを身近に感じて欲しいと思います。

そして聖歌隊としては今回だけに留まらず、これから学校行事にも積極的に参加したり、私も含め生徒皆のキリスト教への親近感や関心を深めていけたら良いと思っています。

キリスト教の文化を通して、神戸国際大学の「神を畏れ人を恐れず人に仕えよ」の建学の精神を学ぶことが出来れば良いなと感じています。



学生・職員による聖歌隊

◆特別な響きに包まれる時間を

神戸国際大学オルガニスト

伊藤 純子

チャペルでは音楽に関わる学生を募集しています。単位にはなりません、純粹に音楽に触れる喜びは、学生時代にしかできない大変貴重な体験であると思います。特に本学には素晴らしい響きを持つチャペルがあります。そしてその建物の一部のように温かく響く、美しいパイプオルガンがあります。

本学学生は、礼拝など様々な機会にチャペルに足を運べば、特別な響きの中に入る体験ができます。それ以上に幸せな体験は、実際に自分の身体を通してチャペルと一体となり、チャペルと共鳴できる体験です。

自分でオルガンを弾く体験、そして人々の歌声が、そのオルガンの響きと交り合う体験。打てば響くような反応の良いオルガンは、多くの学びを提供してくれます。ただ鍵盤を押すだけで充分美しい音色を、更に美しく歌わせる方法を工夫する体験。

また、チャペルの響きに包まれて歌う気持ちよさ・・・これは、共に歌う

人数が増えれば、更に一層の喜びにつながります。その歌にオルガンの柔らかな響きが重なり、特別な空間が誕生する瞬間。

チャペルでは、ぜひ学生の皆様にこのような体験をしていただきたいと考えています。そのため「オルガンの会」「聖歌隊」という形で、学生に門戸を開いております。授業期間中に毎週レッスンをを行い、諸礼拝での演奏や奉唱、またミニ・コンサートなどでの演奏を目的としています。「オルガンの会」「聖歌隊」の学生のほとんどが、これまで鍵盤や声楽にあまり親しみなかった人たちがばかりです。興味のある方はまずは気軽に体験してみてください。一度体験していただければ、その虜になることは間違いないです。

特別な響きに包まれる幸せの間を、ひとりでも多くの学生に、一秒でも長く、味わって頂きたいと思っています。



経済学部3年生 宮本 尚亮くん

◆神戸国際大学から学んだこと◆◆◆

ジュリウス・ソメラ（フリリピン・トリニティー大学 留学生）



歌舞伎を初めて見たり、いろいろな所へ行ったりしました。山本ファミリーはとても親切で、日本人のホスピタリティ（おもてなし）を感じました。有名な阿波踊りも体験することができて、ホームステイプログラムはとても楽しかったです。

日本での生活はとても快適です。日本へ来たとき、私は何をしたらいいか、わかりませんでした。でも神戸国際大学のみなさんがあたたかくむかえてくれて、とても親切にしてくれましたから、私は神戸国際大学の一員になったと感じました。そして、日本語の先生のおかげで、日本語が上手になりました。でも、まだまだがんばらなければなりません。

今年の八月に広島と徳島へ旅行に行きました。広島では広島原爆記念日に参加しました。原爆の犠牲者を記憶し、その人たちのために祈りました。日本人は強いと思います。戦後復興することができましたから。私は今回の広島旅行を忘れることができません。それは私の信仰を深めましたから。徳島へはホームステイにいきまし

た。山本ファミリーの家に泊って、

日本では一人ででしたが、私はあらゆることを楽しみました。私は書道と茶道を経験しました。一人で寂しいときは、公園と川の近くを散歩しました。自然の美しさに感謝します。それは私の寂しさをなぐさめてくれました。日本には私の家族がいまいませんから、あたらしい家族をつくりました。日本人と中国人のともだち、そして、World News Class のクラスメートです。

日本でのこれらの経験を通して、私は次のことがわかりました。

神は私たちが期待するような形では応えてくれなくてもいいです。しかし、神は必ず応えてくれます。神を心から信じていることは、たとえ状況が悪くなる一方だと思われる時でも、神が自分を見放したと思うような時でも、

私たちは神の行いを感じる事ができるということです。神には私たちが見えない偉大なものが見えているのです。神は決して私たちが一人にしないし、見捨てたりしません。今この瞬間も神は私たちのために良き行いをなさってくださいているのです。

もう一つ忘れてはいけないことがあります。それは、時に神はあなたや私のような普通の人を通して助けてくださるということです。私たちが人を助けたり、人に親切にしたりすることは、神の行いなのです。神はいつも私たちを見守っていてくださいます。だから、次に祈る時は心から祈ってください。そして、それだけではなく、必ず行動もしてください。その行動は誰かの役に立つことでしよう。

バレンタインコンサート

2月13日（土）▶14時～15時

オルガン：伊藤 純子
（神戸国際大学オルガニスト）

オルガンの会

生徒・教職員でオルガンを習いたい方、随時募集中！

◆ばいぶるカフェに参加して◆

経済学部3年生 山下裕二郎



ばいぶる・カフェでは、聖書の御言葉を聞き、おいしいお菓子を食べながら、参加者同士が分かち合い、交わりを深めています。私は何回か参加していますが、とても楽しく意義のある時間を過ごしています。聖書の内容について、チャプレンから教えてもらうこともでき、理解を深められるとともに、不安や悩みなども気軽に話すことができます。また、私はこれに参加して「神を畏れ、人を恐れず、人に仕えよ」の建学の精神の大切さや寛大さを強く認識する契機となりました。

とても楽しい時間を過ごしています。皆さんも時間のゆるす時に参加してみてください。

世界の教会 —絵と文—

キリスト教センター委員 小林 敬一郎

今回は小さな島のランドマークとなっている多彩な街の単色の教会を紹介します。イタリアでカラフルな町といわれれば必ず挙げられるのがベニスの「ブラーノ島」ヴェネチアガラスの町「ムラーノ」と良く間違われる。イタリア北部、アドリア海に面する数多の島で構成されたそのひとつの小さな島である。

このカラフルな町が誕生したその昔、冬の霧深い海で大型船と小さな島々との衝突を回避するために建物の外壁の色をカラフルに彩色を施したとも、漁師達がそれぞれ自分の家を分り易いように工夫した智恵?とも伝えられている。

その濃霧から守られた小さな島に尖頭に十字を架した単色の海からは島のランドマークとなった「キューザディサンマルティノ」Chiesa di sanmartino. がカラフルさと逆に静かに海を借景に聳え、低層のタウンハウスを見守っている。(経済学部教授)



礼拝堂シリーズ(2) サンマルティノの教会
設計者、完成年度不詳

◆ 中 原 康 貴 ◆

チャプレン 中原 康貴



わたし〔神〕は世の終わりまで、
いつもあなたがたと共にいる。

(マタイ 28・20)

チャプレンとして大学に来るようになり、早一年が過ぎようとしています。

この一年、いろんな人がチャペルやキリスト教センターにやってきました。祈りに来る人、進路に悩んでいる人、人間関係に苦しんでいる人、スマホの使い方を聞きに来る人、コーヒーを飲みに来る人、久しぶりに母校に帰ってきたという人…。本当にいろいろな出会い、共に笑い、泣き、悩み、祈ることができました。

実は、私の母校にもチャペルはありましたが、チャプレンやキリスト教センターが在ったとは記憶

していません。もし、このような場が在り、そのような存在に気づいていたら、私の大学時代はもっと違ったものとなっていたのでしょうか。

子供の頃、教会の牧師に「牧師さんは日曜日以外は何をしているの?」と尋ねたことがあります。すると、牧師はこう答えました。「教会に来る人のために、いつも教会にいるんだよ。」そこで私は「教会にはよく人が来るの?」と尋ねると「いや、この教会にはあまり来ない。でも、時々来る。その人たちと出会うためにぼくはいつも教会にいるんだよ」と優しく答えてくれました。

いざ、牧師になってみると、ただ教会にいただけではなく、人が来なくても、いろんなことをしていたのだと分かり、「騙された!」(笑)と思うこともしばしばありますが、やはり牧師またチャプレンとしての重要な務めは、「そこにおいて迎えること」だと感じています。

特に用が無くてもかまいません。気軽に「チャプレン、コーヒー飲ませてください」とやってきてください。